平成29年度　第１回立川市史編さん委員会　会議録

開催日時　平成29年９月１日（金）　午後１時30分～午後３時30分
開催場所　立川市役所208会議室
出席者　［委　員］　◎白井哲哉　杉山章子　鈴木　功　豊泉喜一　○楢崎茂彌
保坂一房　和田　哲
（◎委員長、○副委員長、50音順、敬称略）
［事務局］　渡辺晶彦産業文化スポーツ部長　岡本珠緒地域文化課長
小川　始市史編さん担当主査　鳥越多工摩　中谷正克　藤野哲寛
森脇孝広　山下祐香理　岡部利和
傍聴者　なし

次第

１　委嘱状交付　渡辺部長から第２期目の各委員へ委嘱状を交付
＊市民公募委員の星由紀氏が退任し、代わりに小坂克信氏が市民公募委員に選任（本日都合により欠席）

２　委員長・副委員長選任
＊委員長に白井哲哉氏、副委員長に楢崎茂彌氏を互選

３　委員長・副委員長あいさつ

４　会議の公開及び会議録の作成について
○これまで同様、会議は原則公開とする
○会議録についても、これまでと同様とする

５　報告
（１）専門部会活動報告及び予定について（資料１）
（事務局）先史部会の今年度上半期の活動内容を報告する。まず４月から砂川地区を中心に、個人所蔵の考古資料の調査を始めた。基本的には、昭和 40 年代に宮崎糺氏が報告された資料を見直すことから始めたが、その過程で、新たに確認された資料が何点かある。まずそれらの資料化を進めたいと考えている。また、11 月に古墳の測量を予定しているが、そのための現地調査を６月 19 日に行った。塚の場所や草の生えている情況等を確認した。草のない 10 月にもう一度現地調査を行い、その後、11 月に測量をしようと考えている。６月からは、大和田遺跡の第１次、３次、４次調査出土資料の整理にも着手した。７月には、竹内勇貴氏から寄贈された向郷遺跡出土の縄文土器の胎土分析を、山梨文化財研究所に委託して進めている。加えて、竹内氏寄贈資料と大和田遺跡出土の縄文土器に見られる種子圧痕の資料の確認を進めてきたが、これまでに 28 点抽出された。これらの調査を委託する準備を進めている。その他、来年度に予定している竹内氏寄贈資料の報告書の刊行に向け、図面の作成等を進めている。それと共に、資料編の刊行に向けて、全体のページ数を把握するため、仮レイアウトの作成も進めている。また、４月から、竹内氏寄贈資料と大和田遺跡出土の石器の分

析や観察を行う主任調査員を委嘱した。６月には、大和田遺跡の整理を進めるための調査員を１人導入した。

（委員）古墳の測量は、１基だけか。

（事務局）現在予定しているのは、１基だけである。

（委員）種子圧痕について、どこで行うのか。

（事務局）レプリカの採取まではこちらで行い、その分析は、外部の研究機関に委託する予定である。

（事務局）古代・中世部会の活動について、代理で報告する。5月 23 日にあきる野市の石川家、５月 25 日に八王子市の円福寺において、大般若経の調査を行った。７月 16 日には、富士見町の鈴木家で、南北朝期と推定される板碑を調査した。８月には、羽村市史と合同で、御嶽神社の大般若経の奥書の確認を行った。それと共に、調査員の活動として、東洋文庫所蔵の普済寺版の調査を行っている。主に南北朝期の立川地域の人名や地名を確認する作業を進めている。同様に、５月末から８月末までに、関連自治体史の資料収集作業を行い、6,000 点ほどの資料が収集された。また、普済寺古過去帳の翻刻作業を進めている。編集委員は、資料編に掲載する資料の選定作業を行っている。今後は、８月下旬以降に国立市の南養寺の板碑調査や普済寺の末寺調査、柴崎地区の旧家の資料所在確認調査、11 月初旬に普済寺六面石幢の写真実測調査を予定している。

（委員）民間が所有する板碑も多く知られている。富士見町３丁目の「ソトボトケサマ」や常楽院の市川家墓地の板碑、歴史民俗資料館展示室に展示されている経典の書かれた出所不明の板碑など。それらの調査も進めた方が良い。

（委員）富士見町の鈴木家の板碑について、出土地は分かっているのか。

（事務局）分かっていない。

（委員）板碑は移動するものであり、気を付けなければならない。市外から搬入されたものもありうる

（事務局）近世部会では、砂川地区の西部を中心に、１０軒の旧家で資料の所在調査を進めてきた。２，３人体制で調査し、所在調査カードの作成・保存を進めている。それと共に、市民からの情報提供を基に、錦町の板谷家と富士見町の鈴木家の蔵の調査も行った。今年度発行を予定している鈴木家文書調査報告書の刊行に関する打合せや部会も開催した。部会では、事務局の報告と共に１，２人の編集委員等による研究報告も継続して行っている。その他、五十嵐家文書や鈴木家文書等の資料整理も進めている。また、市民協働事業として、「立川の史料を読む会」を、月１回、第３金曜日に行っている。資料は、小川家文書を使っている。今後、古代・中世部会と合同で、柴崎地区の所在調査を行うことを予定している。

（委員）砂川地区で行った所在調査は、土蔵の調査なのか。砂川地区には、まだ土蔵がたくさん残されている。

（事務局）資料の所在調査で、土蔵に限ったものではない。土蔵の中に入って調査を行った例もある。

（委員）砂川町のＳ家について、その後進展はあったのか。

（事務局）何回かお願いはしてきているのだが、なかなか進展はない。地図・絵図編の発行も近いので、その部分だけでもお借りできないものかと思っている。ここで市史だ

よりができるので、それを持って訪問したいと考えている。

（委員長）近世の資料は、多くないと思うが、これまでの調査の結果はどうか。

（事務局）砂川地区で調査した 10 軒では、近・現代の資料が中心である。近世の資料は少ない

（委員）近代部会において根幹となる資料は、行政資料＝役場文書である。前回の市史では、部分的に使われただけである。立川と砂川の役場文書の全体像を把握したいというのが一番大きな狙いである。対象となるのは、歴史民俗資料館に保管されているものと、子ども未来センター地下の書庫にある永年保存文書である。歴史民俗資料館に保管されているものについては、マイクロフィルムになっているので、昨年度と今年度の２年間でデジタル化を進めている。この９月にはできあがってくる。子ども未来センター地下のものに関しては、網羅的に撮影を行っている。近代分については、ここでほぼ終了した。9、10 月には、立川と砂川の役場文書の全体像を把握できるものと考えている。同時に、家別資料の収集・整理も継続してきた。中野家、村野家、豊泉家、鈴木家などである。今年度後半は、資料編の刊行に向け、掲載する資料の選定に入りたいと考えている。多摩地域では、ここで新たに市史編さんが進められている市もいくつかあるが、明治維新後終戦時まで、きちんと役場文書を公表しているところはないように思える。立川市は、明治 22 年の市制・町村制以前の文書も残されているし、終戦直後の文書もある。それらを通覧して全体をまとめることができれば、画期的なものとなるだろう。

（副委員長）砂川村役場文書については、目録が作成されている。

（委員）件名レベルの目録はとてもできないので、簿冊レベルの目録になる。砂川村役場文書については、歴史民俗資料館に保管されるもの以外にもあるので、それらを加えたものになる。それと同じ程度で、立川分もまとめていきたいと考えている。

（副委員長）浦和市では、件名別のものを作っている。立川市でも、件名別のものやネットで検索できるようなものを作ることは考えていないのか。

（委員）今回の立川市史編さん事業では、資料編と本編、テーマ編を刊行するという目的が決まっている。それに合わせて、作業を進めている。将来的に役場文書をどのように使い勝手を良くしていくかとういうことは、別な話として、改めて検討する必要があると考えている。

（事務局）現代部会では、平成 31 年度に予定する資料編の刊行に向けた活動を行っている。活動の柱は、大きく３つある。１つ目は、公文書の調査・撮影。歴史民俗資料館の砂川村役場文書や子ども未来センター地下書庫の立川市役所の永年保存文書の撮影を、６月から進めている。量が膨大であるため、全点を撮影することはできないので、編集委員等が目を通し、選別して行っている。２つ目は、立川基地関係の資料調査。外務省外交史料館での外交史料の調査や横田基地へ閲覧希望資料の伝達等を行った。立川基地が発行した日刊紙や月刊誌、新聞・雑誌等の活字資料や建物や人物、基地内での暮らしぶりが分かるような写真、ＭＰ関係の資料がないか等を、日本人の担当官に伝えた。米軍関係の資料収集については、昨年度から特定部会を立ち上げて、作戦を練っている。これらと並行して、関係者の聞き取り調査も進めている。４月に青木前市長、６月に建設省の専門官だった渡部氏から、市政やまちづくり、都市計画など、直接関わった当事者の思いなど、文字史料からは伺い知れない貴重な話を聞く

ことができた。その他、４月 29 日に砂川地区の巡見を行った。砂川の西部を歩いた後、砂川学習館で、昭和 25 年に制作された貴重な市政映画等を見た。また、中野家資料の整理も進めているが、ここで段ボール箱 10 箱分超の資料が、追加で受け入れられたので、これらの整理も行っている。今後も、公文書の調査・撮影や立川基地関係資料の調査を進めるとともに、聞き取り調査や資料の提供依頼などを進めていく。同時に、資料編の刊行に向け、９月 12 日に部会を開催し、各編集委員から仮の構成案を提出いただき、今後の調査方針等について話し合う。

（委員）米軍関係の資料の中でも、ＧＨＱ/ＳＣＡＰの生活に関わるような資料については、今後どのように調査していくのか。また、資料の形態はどうなっているのか。それと、米軍関係の資料については、現在、ウエブで相当なものが手に入るが、どのように対応しているのか。

（事務局）ＧＨＱ/ＳＣＡＰ文書については、インターネットで公開しているものもあるので、特定部会の先生に調査を依頼しているところである。資料の形態については、紙でコピーできるものについては紙で入手しているが、マイクロフィッシュで購入し収集する場合もある。また、アジア歴史資料センターで史料の公開が進められているので、これらも見ている。

（委員）アメリカの資料館に直接アクセスすれば、史料が入手できる。

（事務局）特定部会員と相談しながら進めていきたい。

（委員長）中野家資料が、近代部会と現代部会両方の報告の中に出ていたが、その概略についてお話し願いたい。

（委員）１万点を超える。まず、明治時代から立川駅前で運送業を行っていたので、駅前の経済活動に関する資料がある。次に、とても有名な文化人である中野藤吾氏に関する資料。それと、藤吾氏の弟で戦死された豊氏に関する資料も豊富にある。二中や立川短大に関する資料等もあり、明治以降戦後に至るまでの膨大な資料がある。立川の歴史を語るうえで欠くことのできない家の一つであると考えている。

（事務局）民俗・地誌部会では、これまでに柴崎地区で 26 件、砂川地区で 10 件の調査を行った。主なものは、西砂町における屋敷林調査、柴崎町１丁目出口・横町地域での座談会、山中天王祭調査、共有膳椀調査、砂川町青年団資料調査等である。砂川町青年団資料については、借用することができたので、デジタル化を行った。また、諏訪神社例大祭においては、各町の御酒所や祭りの実行委員会等を含め、様々な調査を行った。今後は、阿豆佐味天神社の祭礼の調査や砂川町青年団関係座談会、錦町５、６丁目下和田・芝中地域の座談会を行うとともに、各編集委員のテーマに沿った個別調査も行っていく。時期はまだ決まっていないが、柴崎地区の自治会のアンケートも進めていく予定である。

（委員長）民俗・地誌部会では、祭礼中心に調査を進めているのか。

（事務局）部会としてまとまって調査したのが祭礼であり、各編集委員は個別のテーマに沿った調査も行っている。

（委員長）全体として、各部会とも順調に進んでいるものと理解する。

（２）「調査報告書」の体裁について

（事務局）調査報告書は、各部会の進捗に応じて刊行するものである。判型と組み方は、

各部会で判断する。製本はアジロの並製本、口絵はカラーで、本文はモノクロ印刷。編集は、各部会で行う。発行は立川市。書名については、まず共通のシリーズ名がきて、次に部会のシリーズ名、最後にタイトルがくる。刊行年度については、資料２の表のとおりであるが、これは予定であり、今後の調査等の進捗によっては変わりうるものである。いまのところ４つの部会から 10 冊の調査報告書が刊行される予定である。

（事務局）本編と資料編の製本については、前回の編さん委員会後、編集委員会議や庁内で検討した結果、上製本を基本とする方向で準備を進めている。

（委員長）立川市史編さんにおいては､自然環境から平成までに至る歴史の通史を書く｢通史編」と、通史の根拠となる重要な資料をまとめた「資料編」、さらにその背後にある様々なデータをまとめた「調査報告書」の、三種類の本を刊行することを予定している。本日の議題になっているのは、そのうちの「調査報告書」についてで、製本は糸でかがらない並製本、本の名称は統一するとのことである。

（委員）以前、立川市の公民館長だった方が、長いこと立川流の研究をしていた。家に資料もたくさんあった。その方はすでに亡くなってしまったが、資料が残っているかもしれない。確認願いたい。

（委員長）事務局で対応願いたい。調査報告書については、並製本で統一する。資料編の製本方法については、これまで決めていなかったが、いよいよ刊行準備に取りかかる時期になった。そこで、８月 17 日の編集委員会議でも、資料編をどのような体裁にするかが議論になった。そこでは、上製本、並製本とも、一長一短があり、意見がまとまらなかった。その後、事務局でさらに検討した結果、先ほどの話にあったように、本編と資料編は上製本にすることが決定された。

（３）地図・絵図編の刊行について

（事務局）地図・絵図編については、平成 30 年度の刊行を予定しており、これまで事務局が編集担当として､検討を進めてきた｡遅くとも平成 30 年 10 月には印刷に入りたい。判型は、Ａ４判タテ、４色カラー、上製本で 200 ページ程度。デジタルデータを付けたＤＶＤを付ける。印刷部数は、1,000 部程度を予定している。

編集方針は、近世から現代に至るまでの絵図や全図をまずおさえ、これらを掲載して各時代の変遷をたどることと、各時代の重要な出来事や個別のテーマに関わる地図をコラム的に紹介すること。掲載資料は、ＰＤＦデータにして、ＤＶＤに収録する。形態は、図録の形式を考えている。資料は各章の前半にまとめ、少しでも大きく掲載できるように編集する。章の後半で資料の解説やコラムを掲載する。

目次や凡例、総解説の後、第 1 章が近世。22 点 30 ページぐらいになる。章解説の後、第１節が「柴崎村の絵図」。近世の砂川村については、掲載候補はない。第２節は「普済寺領と耕地」、第３節が「用水・分水」。掲載資料の解説とコラムが後ろに付く。

第２章は近代で、34 点 78 ページを予定している。章解説の後、第１節が「明治初期の立川・砂川」、第２節は「甲武鉄道の開通と立川・砂川」、第３節が「都市化する立川・農村としての砂川」または「軍都立川の発展」。第１章同様に、掲載資料の解説とコラムが後ろに付く。

第３章は「現代」で、59 点 76 ページ。第１節は「敗戦から立川・砂川の合併」、第２節が「戦後のまちづくりと立川基地の返還」、第３節は「立川基地返還後の新たなまちづくり」。同様に、掲載資料の解説とコラムが後ろに付く。

付録として、立川・砂川の地図リストを付ける。全図として刊行されたものが対象。本書に掲載されたものだけでなく、掲載されなかったものも含める。

デジタルコンテンツについては、収録形態はＰＤＦ。ＰＤＦのレイヤー機能を使って、くずし字の翻刻や解説、公共施設や学校等の場所、地番を埋め込んでおき、表示した状態のものも表示しない状態のものも見られるようにする。地番については、４ケタの数字を埋め込んでおき、地番検索から地点表示するといった使い方もできる。

執筆体制については、近世、近代、現代各部会の支援をいただき進めていきたいと考えている。総解説は、白井委員長にお願いしたい。各章の解説とコラムの執筆は、各部会で書いてもらいたい。掲載資料の解説は、50 から 100 字程度のものであるが、これは事務局で執筆する。

（委員長）資料３には、並製本とあるが、上製本に訂正願いたい。コラムについては、これで決定と云うことではなく、このような内容のものが各章に付くと理解してもらいたい。ＤＶＤについては、紙で掲載されたもののデータを、画像として収めるものである。大きな全図については、ＤＶＤで見てもらうことになる。ＰＤＦのレイヤー機能の件については、近世の絵図等にはくずし字で書かれたものも見られるが、その部分に、注釈をつける様に、解読した文字を張ることにより、くずし字を読めない方にも理解できるようにすることができる。

（事務局）ＤＶＤに収録するすべてのＰＤＦに、レイヤー機能を使った表示を行うのではなく、効果等を考え選択して付けることになる。

（委員）多摩地区の自治体で、絵図や地図をまとめたものを刊行した例はあまり無い。立川市では、もう 40 年も前になるが、モノクロ版で地図集成を出したことがある。地図を集めて、その地域の変遷を追うというのはなかなか難しいもので、当時としては画期的なものであった。今回は、ＤＶＤも付けて、自由に拡大・縮小してみることができる。立川という地域が、どう移り変わって来たかということが、視覚的に追うことができる。一般の市民にも関心を持ってもらえるのではないかと、期待している。

（副委員長）図書館には、新旧地番対照表がある。これは大変便利なものであるが、これを反映させることは考えているか。

（委員）地番や地名を検索することができるようにはなる。

（委員長）新旧地番対照表といっても、そもそも土地の広さが違っていたりして、同列の比較はできない。ある時点の地図の区画に、新しい地番を埋めることは、正確なものにはならない。違う図面を比較してどこなのかなと、利用する方が行うことなのだろう。現代の地図を比較することは容易であるが、100 年も前のものだと、なかなか比較することができない。それをできるだけ分かりやすくしようとするのが、今回の試みである。

それでは、次に、具体的にどのような地図・絵図が掲載候補になっているかについて、説明願います。

（事務局）近世では、まだ部会で本格的に議論したものではないが、現時点で、22 点を候補として挙げている。第１節では、宝暦７年と享和４年の村絵図がメインになる。そ

れに、年代ははっきりしないが、幕府領、旗本領、普済寺領が視覚的に分かる絵図があるので、これを加える。第２節では、普済寺の境内図と周辺の絵図を掲載する。第3 節は、用水路や多摩川の普請に関わる絵図の掲載を予定している。今後、部会等で検討し、22 点の候補を絞っていきたい。

（事務局）近代では、34 点を候補としている。メインとなるのは、まず明治３，４年の多摩川流域の村々を描いた絵図。多摩川の源流から河口に至るまでの流域の村々が描かれたもので、広げると 27 メートルほどになる。その他、地租改正時に作成された柴崎村及び砂川村の地引絵図、明治 10 年代のフランス式彩色地図、昭和５年ころの飛行五聯隊配置図等もある。また、著作権を確認する必要があり、取扱いを保留しているものもある。

（事務局）現代では、３節構成で、各節の前半部分で全図を紹介し、後半でその時代を象徴するような話題を取上げていく。主な掲載候補は、第１節では、昭和 24 年の立川市商工案内図、昭和 30 年代の米軍基地関係の配置図や飛行場拡張予定図、昭和 30 年代の都市計画図などがある。第２節は、立川駅南口土地区画整理事業に関する地図やけやき台団地と富士見町団地の造成に関する図面、交通量帯図、農地がどれほど減ったかという現況図、返還直前の立川基地の図面や米軍住宅の所在図などを候補としている。第３節では、前半は全図で、後半は立川基地跡地利用構想図、立川駅北口土地区画整理事業の前後の地図等を挙げている。今後、部会の話合いの中で、資料の差替えや掲載順の変更が行われることも考えられる。

（委員）現代の最後のところで、モノレールに関しては、どこに掲載するのか。

（事務局）全図のところで紹介しようと考えている。

（委員）奥多摩バイパスの計画路線が書かれている昭和 37 年の立川市の全図は、大変貴重なものであるが、掲載するのか。

（事務局）掲載する予定である。

（委員）地図・絵図編を編集する場に、豊泉委員ともども参加することはできるか。

（委員長）事務局で調整して、ご協力を得ながら進めてもらいたい。

（委員）小河内ダムから移転してきた方の集落がある。砂川地区にもある。

（委員）西立川駅周辺にもある。

（委員）近世で、砂川の絵図が全くないが、「上水記」の中にある図を掲載できないか。分水の取水口等も描かれている。特に、砂川分水の取水口については、現在とは別なところにあったことが分かる。砂川分水は、砂川村の成立に大きな役割を果たしたので、検討願いたい。

（委員長）玉川上水の絵図は、あまり多くない。近世の砂川村の絵図については、違う探し方する必要があるかもしれない。近世部会と話をしてみたい。

（４）その他

（事務局）次回の審議会は、平成 30 年３月 27 日（火）の午後１時 30 分からを予定している。市史だより第４号が、９月 20 日に発行される。第５号以降についても、ご協力願いたい。また、個別に連絡したところだが、８月１日に、市役所本庁から錦町３－５－22　ＹＡＺＡＷＡ　ＤＥＵＸビル２階に引越しをした。これまでの倍ぐらいの広さになった。

（委員長）資料の収蔵スペースがあり、中野家と鈴木家の資料や地図・絵図編で取り上げる図面等が保管されている。

（委員）前回の委員会で話題になった雑誌「つむぐ」について、中心メンバーの吉沢さんに会う機会があり、バックナンバーをもらって読んだ。その結果、大変貴重なものであることが分かった。1984 年に創刊され、これまでに 10 号まで出されている。公民館の講座の受講生が「立川・女の暮らし聞き書きの会」を立上げ、20 年も活動を続け、定期的に記録を刊行してきた。幅広いテーマを設定し、それぞれに造詣の深い一般市民を探し出して丁寧に聞取りを行った内容をまとめたもので、独自データも収録されている。ここで議論している立川市史のように、公的機関が編集して刊行するものは、どうしても公式の文書による制度や組織に関する記述が多くなり、カバーしきれない部分が生ずる。「多摩のあゆみ」やこの「つむぐ」のように、それを補足する資料を示すことによって、市史はより立体的になるのではないか。

（委員長）複数の部会に関わるものであり、まず、事務局で資料や情報を集めてもらいたい。

（委員）会では、「つむぐ」の最終号を出した翌年（平成 15 年）から毎年、「自由時間」という雑誌を発行しており、これまでに 14 号出ている。公民館活動から生まれたこのグループがどのように活動してきたか、どう変遷してきたかということを、社会教育の視点から捉えることも重要である。

（委員長）まずは事務局で実態を把握し、積み重ねられてきた市民の活動をどうとらえていくか検討することとしたい。

＜以上＞